

特 集

新型コロナウイルス感染症と公衆衛生

特集にあたって Editorial

研究委員会委員長 木村芳滋

Yoshishige Kimura, Chair of University Research Committee

神奈川県立保健福祉大学誌は、本学が開学した平成16年度に創刊し、本号で第19巻となった。次号は節目の第20巻記念誌にあたるため、研究委員会では様々な誌面の刷新とともに新しい企画を出していこうと考えている。この度、ヘルスイノベーション研究科成松教授より「新型コロナウイルス感染症と公衆衛生」のテーマで本学教員を中心に各分野の専門家によりコロナ禍での最新の公衆衛生に関する知見をまとめて大学誌にご寄稿いただいた。大学誌にとって特定のテーマでの「特集」という新たな試みではあったが柔軟に対応し、成松教授をはじめとする著者の先生方のご理解とご協力を得て、特集が完成した。これは今後の大学誌の可能性を大いに広げるものである。

今年、開学20周年を迎えるにあたりさまざまな事業が計画されているが、大学誌としても研究成果の発表の場という位置づけを継続しつつ、時事的な話題に対する特集記事、広報的な寄稿や依頼原稿を盛り込むなど、誌面の充実を考えていきたい。

新型コロナウイルス感染症と公衆衛生 COVID-19 and Public Health

ヘルスイノベーション研究科 成松宏人

Hiroto Narimatsu

School of Health Innovation, Kanagawa University of Human Services

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の感染拡大は日本そして世界に医学的にだけでなく、社会的にも大きな衝撃を与えた。人類はその歴史の中で幾多の感染症に打ち勝ってきたが、今回の感染拡大は、その戦いはいまだに終わっていないことを認識させられた。そして、現在、公衆衛生学の重要性にあらためてスポットライトが当てられている。

公衆衛生は「もっとも古く、そして、もっとも新しい」学問の一つであるといえる。COVID-19対策において、公衆衛生上現在取られている感染対策は、その学問の黎明期から今までの知見の積み上げが基盤になっている。しかし、日々刻々とかわる状況の変化に対応するためには、それだけでは十分ではなく、多くの課題が山積している。公衆衛生も常に発展・進化をつづける社会にあわせて常に「新しく」ある必要があり、COVID-19の感染対策でその真価が今まさに問われている。

神奈川県立保健福祉大学ヘルスイノベーション研究科はイノベーションの力で新しい公衆衛生を創り上げる研究科である。COVID-19対策においても、時には行政などの公衆衛生の現場と連携しながら、現状の課題を解決出来るようなイノベーションの創出をめざして、さまざまな挑戦を続けている。

イノベーションを生み出すためには、様々な分野のコラボレーションが不可欠である。そしてそのためには、フラットで活発な議論は大変重要である。本特集は、令和2年度先進異分野融合プロジェクト研究立案・推進事業（神奈川県立産業技術総合研究所）「ゲノムコホートを活用したCOVID-19に関する市中モニタリングと対策研究基盤知見などの創出」の成果報告にあたり、ヘルスイノベーション研究科内・外の関係する研究成果から作成したCOVID-19に関する知見のまとめを、広く発表するために再構成したものである。私たちは、公衆衛生に関係する様々な視点から、COVID-19について論じた。これが、いまだ収束をみないCOVID-19の対策へ、そして、新しく来たるであろう、「ポスト」もしくは「ウィズ」コロナ社会はどうあるべきかの議論に貢献することを期待する。

